



張句



今をむりし東梅中川の寺より  
くね東山園崎の草庵よかき  
径々もともや十はぬの我の  
年さちけきく乃折ゆき  
芭蕉翁の及句をよみて  
ふかこの世にけつこのあま

古芳の蕉翁句集乙洲の及小文  
史邦の少文の庫支考の及日記  
桃結の津美子島風國の泊歌集  
多門人の古き句集を編輯  
この芭蕉句集のいやすらふあり  
この芭蕉翁句集を著述して

上二

この芭蕉翁句集を著述して  
乃と我の及句集をいふ小冊冊  
物として花畧月夕の好士の  
神あすふかきありありあると  
業林井筒の及句集の及好みに  
よとしてその句をわらうと年

歴々の以弟の書る人年歴此  
分何さうしうを抄の句は題のまゝ  
母書して句体お流形やうとを  
去るむ四季のあつてはふれ  
葉乃事とて法集の中五回矣  
あつたま乃句集にふると志守

句選おあつめ一と六百字餘句  
かたりしにわかれし書お拾ひ  
あつたまとて是ゆゑ句を  
追加しそせざるも十餘句と  
きりけりて思ふに思ふ  
阿事たりきりて多の思ふし

たまたま心ごとくしる後世  
人の中は心ごとくしる者

安永五年四月廿九日草子

拙書及幻阿書之

上  
三

芭蕉公翁後句集上

春

庭洲のほろ誰うと庫より今朝の春  
半中おろし心ごとく我のちかきら  
英立や新年もさき早み外  
山家よほをさし  
誰年そ齒染ふは餘おろし

嵐書の許りく宵月小袖を結りけ  
誰かゝる海の中へくくおのりたる家  
音の道なきは多路行かん酒  
のくおんをくくえ日なきそく  
餅くくくくく  
二日にともぬるまきをけりたれ  
まき立くくくく九日乃聖山く  
え日又田くく目くくく公れ  
都ちなきはくく事くくく

薦を巻くく雑人いすまむのく  
ゆりたなきをくくくくく  
三日只法園く題平月四日  
大津路の年くくくくく何佛  
ゆくくくくくくくく乃面  
人まきくくくくくく梅  
蓬菜ふくくく伊勢路知く  
子白くくくくく友もく  
古畑や暮はくくくく男とも

ようくつんれと芥を忍びく垣根が  
萬葉下りくふら雲うのむ女葉ふ  
一と粉子一度つまらてまらなり  
うらむまや木卯たつらる教のあ  
美多や餅子書まらる縁のせん  
こは梅子牛も初まると啼つ俗  
世草のあつたあそ  
あまにまき梅さへ余はたのま縁が  
伊加のあまのまらる

梅のこり古果の梅より成りまら

秋風の空備の山家とふ 二句

梅ふしおのや 静寂ぬすし  
撰木は花ふのまらぬけつら  
う先咲やまらるる原太良  
あまの梅の心をまらる梅のま

山家

も鼻のままらる梅ははらのま  
伊加の山家らるるはらのま

夜更の燈をそ暮れとてあをいりて

阿まきまひり

多ふ白へうにやう岡を梅乃花

門人何れまらけくまらあは

馬の姓しこ

わきもたかきと義の中ぬる梅のま

伊勢の非垣乃月と梅一本のま

子とほ館の後下り一本のま

は子良子あ一ゆゆしとあひのま

細代民部息ふあひ

梅乃木に物ヤとら木や梅をま

園女うあひ

暖な屋の奥そのぬりしは梅

山里きり案ふまきし梅をるを

卓袋真月待

月待や梅うけけり中山婦

墨をこき梅打乃るを年の鞭

まきやうとあひのふ月と梅



去年の作へるよ人の事とてきき  
 暮れ盡のこし味もすこし梅のそれ  
 梅のこいのめと目せやう山はこち  
 何と事新八志事此二百十の月  
 ありしとて一周年の程ま父梅九子  
 乃方へすきりて  
 梅のこいにむうしの一文字をきき  
 うれあふこころまの事おれり  
 紅葉もやんぬる位に玉すし  
 上七

乙洲の江戸へ越く時

梅のこいのめと目せやう山はこち  
 うれあふこころまの事おれり  
 かきこふぬをきくの梅やまの  
 うれあふこころまの事おれり  
 けしき物やんぬる位に玉すし  
 八九間をこく西のち柳の  
 傘に押かたふるをきき  
 真如もやんぬる位に玉すし

吉野の菩提寺をて 二句

清く静くや心に汲かき清く静  
き白くくくくくくくくくく

尾別菩提寺奉納

菩提寺やしぬ露もまはる  
春もや草もとのまに草乃道  
不性もやかた起る道し 春の雨  
けふ雨や善哉くく河川や静ま  
まるや静の集つふ至招乃偏

伴がらの園に彼の座新大佛をて

丈六くく陽を高くく名をくくへ  
かきまやまのくく海にれ一二寸  
既火くくくく肩もくくくあなれ  
かき海もや紫胡のくく海をくく

指所くく人なり

瀬の糸くくくくくくくく田のたぐ  
袖もくくくく田螺の海士のくくく  
藤ふすくく白くくくくくくく

鰓やあし魚一ちのち一す

各別

鮎の子はふゑる別うか

觀子圖傳

白魚やまき目をあくは乃細

老慵

蛎よりまも海苔をへ老のまもをこ

ふ里う許をく

海苔汁のも海苔をくつは若梳

ねろくや歯ふあて海苔の成

二月半に熟りて

水くやこもるは倍の雪のま

是揚り刺ぬり醫術の海苔かき

知むるふ板の刺し既う那

伊勢くして

糸板やとひもかけすは海苔係

糸板のまをくそ西の洞をく

海苔乃信をぬむ二句

鯨よりたゞしききりまの岸の神  
何乃木の谷くもくも白くく

莊子 徐績

夢古の徳徳とらん飛とて  
蝶のよふとてん中身の目影の  
起りくわの友まきんぬる胡蝶

古池や蛙と云く水乃

古池や蛙と云く水乃  
蝶の羽の姿方こゆる埃の塵根

まきと目とまきくくぬる産く那  
系中と花もよつらひ啼ひく  
雲者よりくもやまらみ味の籠

父母乃

父母乃頻りくくく一雉子の  
ひくく啼中此松も糸子結く  
蛇く中とまも悲くくまの  
杯くく泥子落くくむくく遊  
蝶ちりて埃くく家子くくつ

雀子とあそび啼み守鹿乃巢

田舎にありて

麦飯をいやつてゑう猫のつ  
猫の急やむとた圍乃然月

湖水眺望

辛崎の松を花をり眺る

きりぎりす故人再別

二投又見れ初より鹿乃角

雪のまじりて生花梅の都

上七

落さすまよ水糸一ひり花椿

梓打の磯

は提乃むり接と梅のま

山返生る何處のゆの

呂丸う旋まきく

愛帰し事あまきく

善提山

山寺のあそび告と母老ちり

二重山

頼つても東門を走むるはみづから

頼氏尚令有職の人を建

物に名をまのしぬ萩乃わの葉も

茅令の画像

津よみ月もさやとや海軍の家

本るは情もや生あぐま入る草

ま柳の泥よりあぐまの干し

信るより人の徳も杉風別荘

うけ

草の戸も信るゆふ伏る雛の家

伏見西巻も信よりくま

我をくまゆも信のちりせと

まき垂る柳様けうの内人よま

嵐をあり

あ乃手に桃と桜や草花候

旭へま解るも冷ね桃の花

咲くもは柳の中より初さくら

伊賀と聖徳寺初舎

初ささるる折しも夕のよき日なり  
顔よりぬぬ霞白もあまの川梅  
茶良士重士堂依庵八重梅  
西の傍にまき  
多復た瓦おえゆらん山さくら座  
習もく廿三を経て旅人土芳  
大仙寺にあふ  
命あふ川中よ活きぬ梅の那  
山はくく瓦ぬくその中二ツ

権九子に君ふ野に花見澄きを  
くさやうりく

扱くゆりたさひあき扱ふ

名の〜に書付く

芽梅の〜扱ふを〜扱ふ梅木並  
扱ふまき〜や日〜に里上重  
廟も〜酒も〜陰やち〜け〜  
山

梅は首〜一嵐おの〜

似今一や豆の粒先一に極の季  
木花のそまけも能もはくくふ

万平別聖

春の夜も極のめそ 志まひる

白雲へはみり

うらなま一夏世結也の山さく  
阿蘭陀も花葉本にきりるる

愛方知酒聖食之鉸神

花よりきせわの酒白く飯是し  
艶なりやつてさくや誰うそ乃換  
世りけりる花も念佛中り  
葉畑みさん形形ふ雀の如  
観音の覺りたり川系  
花咲く七り結りる林鹿の如

物皆自得

花子遊ふ社さくひそ友十の  
鶴乃巢もさくそさの葉



よもぎ巻

花の世は経るもよもぎの葉はほろろ

おまの梅もよもぎの葉はほろろ

あつきのよもぎの葉はほろろ

らふよもぎの葉はほろろ

はくとよもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

よもぎの葉はほろろ

早稲屋村まで

花の陰 遙く仰る 花の影 那

かつら 花の影 林を 通るに 四方は 空

さくら 花の影 花の 影を 仰るに 花

ゆめ 花の影 花の 影を 仰るに 花

ちあ 花の影 花の 影を 仰るに 花

つと 花の影

花の影 花の影 花の影 花の影

二つの影を おもひ 仰るに

こい 花の影 花の影 花の影 花の影

路草亭

花の影 花の影 花の影 花の影

伊加美の 園花 花の影 花の影

乃乃 花の影 花の影 花の影 花の影

つと 花の影

一里 花の影 花の影 花の影 花の影

花の影 花の影 花の影 花の影

花の影 花の影 花の影 花の影

珠碩の酒は春の記ありて

空方よりまき以入事なき 湖乃波

及張のより酒一樽本春の指活

兼一樽酒よりまき入るむむて

飲めく花生よりせん二杯持

肅山のよりまきと揮雪の画を翠乃

撰り

友花やもも花より双今此春

僧専吟鉢別

鶴は毛のらまきあらとやものま

流活るま

あけの房よりせん 花乃と題

雲屏子深川の藤今まきふ

花よりまきとけしとまき 柳系

様とく如く藤春よりまきをにまき

まきのまきとらよ

花よりまきとれまきとくひの風の象

と舞く花よりまきとらよまきとらよ

さきさきおたのめの中へはあまのま  
さきかたらのまきほをいれしむ

四つめいゝの梅ぬき見こころるる

支考東の銘別

世々ろろ推せよ花のうへ又雲一々

幅幅も出よく身世は花より香

路通をちかくと趣く時

さきまのくまのまのの花をうらもまよ

子に傳とく人ぬきとふぬれ

さあ体のくま梅店を推せりけり

跡踏まきしとれは丹下舞はく女

丹波市とやいふまをまのま言か

らるる

さあ外へ寄りふらるるやぬら乃花

山吹のまあまはたのまもちたさるや

西河のま

あらうく山吹ちるるを流かるる

やまぬきやまよはらはくた枝の形

画溪

山ぬきやうほの焙炉の白ふ時  
程草や花乃ほのりき雲阿の  
白く山もやわたり結梅あさ  
るまの如く西や二葉乃花子しき

初瀬

英の石おや霧り人ゆり事の隅  
障種ぬ里きを何をうけたりと  
りまきりわたり浦を退けり

正十九

お逢之ふ里はれと胸をあきりて

初春や多啼魚の白き如く

金湖水性

山雲霞の如くの人と花とを

夏

中野の山に雲が  
ついでに

夏はあつた

詠句

一ツ花を

はらふは

清く美人

時を

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

瀬川の舟の矢先は第一や子規  
ほくはくはくはくはくはくはくはく  
西條まはるはくはくはくはくはく  
やうはくはく

藤木らやうはくはくはくはくはく  
轂代ら馬を遠く世の身の間  
短冊はさきさきはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはく  
孫を懐くはくはくはくはくはく

不卜一月忌 秋風氣進  
ほくはくはくはくはくはくはくはく  
京ぬくまはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく

蜀魂大舟一 教をくもはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
木のはくはくはくはくはくはくはくはく  
鳥絨まはくはくはくはくはくはくはく  
保くはくはくはくはくはくはくはくはく

一 おしの江も横いもやちいれす  
あふちたあある横いもやちいれす  
暖やまて 朝日やちいれす  
思ひ出すたまふやちいれす  
あふちたあある横いもやちいれす  
あふちたあある横いもやちいれす

灌佛の白かまもあふちたあある  
灌佛やあふちたあある  
あふちたあある

楳の字やあふちたあある 酒

園まも大願和尚もあふちたあある  
あふちたあある  
あふちたあある  
あふちたあある

あふちたあある

其角もあふちたあある

あふちたあある  
あふちたあある



氣負亭の遊楽ありし

杜若ありまよひ遊楽向能おもひらり

大坂也或人の行ま

遊子花かゝるおも花のまゝのふ

山崎宗鑑屋後まで追速殿乃

宗鑑よりつゝ我人まゝかゝるまゝ

世にまゝまゝとてはのまゝのまゝ

みかゝる身海あんかあつまゝ

もたゝく水徳まゝ杜若

白々や内而の花は咲つゝむ

贈杜園子

白茶子に相りく標のかゝるま

漁人の影ちうた茶子花のま

くにまゝまゝ

茶の類まゝのまゝまゝまゝ

まはりやま餅の種より出つゝん

伊豆の園軽う小崎乃葉にまゝ

まゝは秋よりけしけしまゝ

ゆめくもくもく花の道しほひのくもくもく  
のまはるくはたさくもくもくもくもく

よきゆめくもくもくもくもくもくもくもく

甲斐の国山家母もくもくもくもく

り物おまもくもくもくもくもくもくもく

まの穂を個もくもくもくもくもくもく

武府もくもくもくもくもくもくもくもく

人くもくもくもくもくもくもくもくもく

ゆめくもくもくもくもくもく

まの穂をくもくもくもくもくもくもく

くもくもくもくもくもくもくもくもく

東つらもくもくもくもくもく

かきんもくもくもくもくもくもくもくもく

贈拙隣新宅自画自後

きくもくもくもくもくもくもくもくもく

招提もくもくもくもくもくもくもくもく

法目れもくもくもくもくもくもくもくもく

まの葉もくもくもくもくもくもくもくもく

日光寺

何れもいと昔の葉の如き葉の目見え

後磨の浦一見の時

すももに花の如き花の目見え

雲の如き雲の目見え

日光寺

木の花の如き花の目見え

石の花の如き花の目見え

石の花の如き花の目見え

日光寺の自心院

甲斐守の自心院

先事おむ推の本もつりて反本を

松風乃の如き花の目見え

清風乃の如き花の目見え

甲斐守の自心院

山花乃の如き花の目見え

あゝ山花の如き花の目見え

大垣の塔と日光寺代系勅を

扈從と園田何事か

世のあはれよかきく一為りの

画談

るかくく我を陰うきく反折

落拵のめおきききききき

ききききききき

と後よ人丹きききききき

秣負ふ人を枝折乃夏中きき

殺生えにきき

石孔ききや反折ききききき

高館

其草や兵きききききき

牛の子や推きききききき

小樽をきききき

うまぬや牛きききききき

里度むきききききき

うききききききききき

能那一ききききききき

うた我をばさしきよかんとも  
遠出よかひ屋う下乃ふまのま  
わの字有る敷の小まきいふ路ま  
かつ不賣いふねん人き碑ま  
鎌金をまきく出まんこり  
うらみ乃流

水何を流しき流るや夏の初  
あや先生う新の齋乃まき  
信士にいふまきを日留を園求る

を乃流又日まきまき

花何やめ一夜まかひしり  
佐藤を自らまきのまき義經乃太刀  
并まきをまきし物

乃まき太刀も五月まのま紙織

仙童ま入るあやまき日書ま

まきまき組のまきまき

あやまきまき人まき鞋のま  
まきまきまきまき

病中自録

髪をくくし中穴を形其蒼一五月雨  
けしききつしかき事ある物や津山の橋  
善端を語ると此の五月雨は  
けしききつしかき事ある物や津山の橋  
先堂と七宝ちりりせし珠の麻  
風子やあま金の程をききにけり  
五月雨忠降乃ししとや先堂

けしきれをあのめくししとや川  
日た道や葵かきぬく五月雨  
落柿全きぬ

五月雨や色あはるる五月雨の  
きみれや春きつしぬ 幸かきぬ  
露沾はるる五月雨

けしききつしかき事ある物や津山の橋  
大井川  
大井川  
大井川

五月辛酉の御宇に思ひおこるるに

月半かゝ家姑や対こく五月の由生  
後河原やこゝ橋も糸結白玉  
眉掃も付にけしおかゝ志  
つるしくと枝の花乃神年ちか  
ゆんこくと標や面結 必々も  
幸つと白身は日に後あつて

やうとちん藜の杖やあつる日ま  
糸深や西や西抱う福ふの花

正 廿九

栗のよもほをちりて世もいふ  
信あり可仲とふ

世に人乃月身ぬふや新の舞  
筆白とふも新く世隈の松見勢  
や世ははらうとて錢ありけり

橋よらと松を二木を三月こ  
世の志や新を小庭に別度妻  
あらし志や帷子耐乃うき世美

新橋舎

拙者もふりむりもあはれ料理の間

森川許六儀子二句

持乃ら花の公女を似よし雪の積  
うた人れ持みもかきへ本られ魂

山中道安

登風馬の尻すゝ 捲ゆ心

この境もひこふあはれとよま  
乃らや

うはれあり角ぬりわもよは慶あはれ

上  
三

あはれうらうらく 荊をうらうらもあはれ

本らるる活の結思ひまて大津より  
ちるはあはれ乃ら見はむ

こはげらる田の月よりうらうら

草乃らあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれ見

あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ



東洲白川あり

南島の宿哉ふの鶴千回よのを

大津湖仙あり

この宿と水鶴とくぬの鹿かき

露川ふ山もくさなまきとまはらひ

たに山田氏の家をうかうと舞す

水部なくと人のこゝろを仕を治り

持御とふふのふはつんと暮夜

つらねひやまのり一冊

三十一

中へゆく心まよひの川乃結 報

持御と通るふの行はゆきて

おもろくしてやそを思へた持御も

飛ねく思ふまふも早苗を

はなはなと持御とまよひの里へ

あつて田の畔を結ふつと行は

とまひとまひは柳の流るるま

けりつ

田一枚植えぬとまは柳あり

奥あふ今の白川を渡る二句

つと苗もも家色もまき日敷れ

西へ東へまきの早苗も風をまき

多窮らふもまきの白川の関り

まきのまきのまきの

風流のまきのまきの田植り

まきのまきのまきのまきの

まきのまきのまきのまきの

田植り

尾張りまきのまきの

世を括り代り小田植り

まきのまきのまきのまきの

重行直り

免つりや山を出版の初茄子

清田堀本氏

牛騷日

昔まきのまきのまきのまきの

陰まきのまきのまきのまきの

明石の夜泊

晴き夜もさう静かに寝て夏は月  
月をふくむも物なきよき夜は夏の  
よきとてたまふ寝よぬ家な夏は月  
夏乃月清油よりあそふ赤坂

曲想の事

まよ乃おちあはれさしぬくもや物  
指さるるあはれはさう静かに

稲妻の心

持渡さるる心もさう静かに

立石の事

采さやあそふ心もさう静かに

無事迅速

やう死ぬる心もさう静かに

人の静かなる心

さう静かにさう静かに

静かなる心

静かなる心もさう静かに

佐野の中山を

今から三日の月夜の下すくそ

風瀑を越列き

月夜神を八小窓の中山をすくそ免  
破風台に月影やとらふ夕まをみ

長谷川十八樓

此處を重目小窓の中山をすくそ免

尾花は清風を

涼しき山をすくそ免

すくそ免の三日月夜お黒山  
あつらふ山や吹浦りけて夕まを免  
ゆきや野原めきそ海すし

花枝と漕ぐよまをすくそ免

西りは海のリ記念をのり

夕まを免様すくそ免乃花  
小朝さきと柳さきくそ免

田舎川系納涼

川風や岸のさき免を夕まを免

田家

飯あかく燻うちそくや文すらん  
川中ね根まよよらふすまのね

雪の足踏むとて心まきなり

まきしはらふの園よもあはれあふ

無事まうらぬを松を極るをそ

涼しやとくくにせ松の枝乃形

まきしはらふを陰まうらぬ松の

風のまきまうらぬとて川

羽黒山

有くやまをかちしは 南 谷

丈山の像平福以

風葉あつ羽織を襟もつくろつを

さへや風のかけりお お松子

小倉山常寂寺のそ

松抄をほろそや風はかほる音

雪のまきしはらふの山

湖や果を枝かむや乃峯

本間ら馬の家名を稱して二句

ひらりととあつらふ廟や中々のぬ  
蓮乃香の目をかきまはれや面乃鼻  
夕暮の白くおのほのほな紙帽とく  
ゆふの息や酔く顔出さ意の穴  
夕かほふ下飄むつて遊ぶもり  
そそりて半橋さくむ衣をきき  
籠りて花のみりの夜移るる屋  
さくもくよそ思ひ笑ぬ此むらん

上 三六

李由の件へ又の書信

きつかにせし森のうらの森の山  
何ぞおぼえまて古きと頼り  
此の心をせしむ下に生はの程程  
せしむる花のまじりてはるを  
接面はるも

あつら花をすくうのうすし  
橋葉山のねお下流

山のけやきもやふらんうら

我々の業も同じや 且つ人 鴉も色せん  
花も実と一夜も此れはさう申す  
夕ふも朝もさうつゝはぬらのを  
柳も花もさうさうすべし 此の辰  
柳こころは 何れもさうし 初言の業  
之道もさうして

我より似れ二ツに 只此一 志業も  
さうは度むさうさや 甚き事 聖

正成像 鐵肝石心此人之情

正成

接子下 かの朝顔や 梅の 花  
酔く梅人 接子 咲く 石は上  
孫の 実も 泥濘もせん 志の あり  
さうは 業も さうさう 清く 那

岐阜山

城 沼や古井の 清も先 同ん  
那須の 温泉 湯の 相殿も 八幡を  
後 一さうさう 神一 方に あり  
湯を びす 松も 同 一 志 清く 水

むらさきやうもや葦もやうくあやうも

晋の園田をうらやむ

客形よこま癖のこころやまきむしり

子子うきあつりうきをまきてまきあ

汗へすうらりうき

かきこ人の小神も今や土用を

修路光明もはて行者まもとおと

友山も足駄をおむそ途の那

秋鴉も人の住糸にまよ

山まきこもこまき入るや友水委

松島

鳴くや中江もまきし其志也

新を江目水亭に

水の行く氷室もゆき柳の如

異さし日を海子入るうきと川

水も自らゆく病やまき星も

さか月や朝も河原も垣ら

ら月や嶺より牛もく嵐や



不卜亡母退悼

あ向く終とひ終へ道明寺  
かまうくういふまきう上の籠乃腸  
世は夏や湖水まううぬ浪のうへ

十本節亭より

秋ちう宛公のうらや 甲子年

